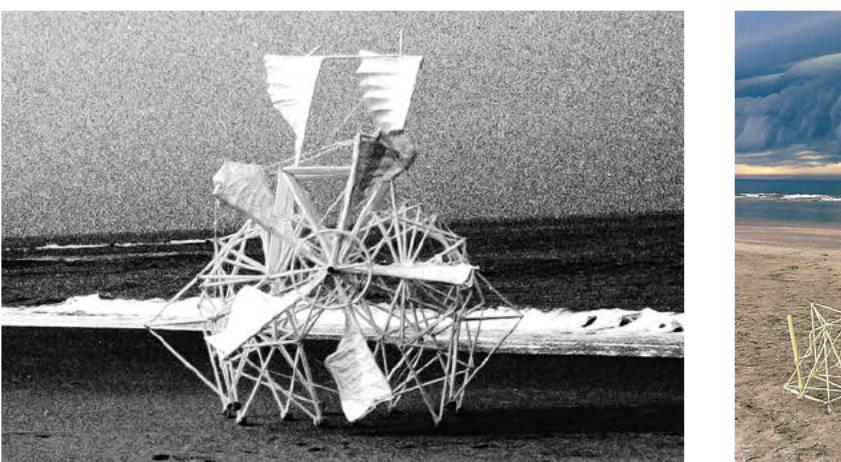




Animaris Sabulosa Cutis | アニマリス・サブローサ・キューティス

「サブローサ・キューティス」とはラテン語で「砂の皮膚」を意味し、粘着テープでつくられた羽の裏側に、風で飛ばされた砂が偶然付着したことによって生まれた。風の向きに対して直角方向に動くことができた初のビーストで、スピードと推進力を変えるギアボックスを持っていた。ビーストが大きく進化を遂げたカリダム期に誕生し、現在は“化石”²となっている。

2. 動かなくなったストランドビーストをテオ・ヤンセンは fossils=化石と呼んでいる。



Animaris Rigide Properans | アニマリス・リジデ・プロペランス

プラスチックチューブから作られたパーツを組み合わせることで、同じ個体の複製が数々生まれ出されたタビディーム期に属す。現在は“化石”となったが、プロペラを備えカニのように横向きに高速歩行をすることができた。工作キットのミニ・ビーストはこの作品がモデルとなった。



Animaris Ordis | アニマリス・オルディス

脳を意味する「セレブラム」期に誕生した。風を受ける羽やバランスを取り尾にあたる部分にはいくつかのヴァリエーションがあり、今回展示するのは新しいバージョンである。比較的小さく軽量のため自然の風で素早く走ることができるし、手で押したり引いたりして動かすことも可能だ。

2. 動かなくなったストランドビーストをテオ・ヤンセンは fossils=化石と呼んでいる。



Animaris Percipiere Rectus | アニマリス・ペルシピエーレ・レクタス

「レクタス」とはラテン語で「率直な」「素直な」という意味。セレブラム期に生まれ化石となっているこのビーストは、テオ・ヤンセンに「はじめての従順なビースト」と言われた。強風時には体が飛ばされないよう頭部のハンマーで杭を砂に打ち込み地面に体を固定し、それを軸に風に向かって横風を回避することができた。



Animaris Siamesis | アニマリス・シアメシス

現存する歩行可能な作品の中で 250kg と最大級である。初代ユメラスの歩行システムを持った進化形とされる。シアメシスとは二つの類似した部分が結合されていることを意味する。姉妹作品には同じ双胴体のカレンス・ヴェントーサ(今回は展示されていない)がある。歩行ユニットは、100% プラスチック製で、糸や竹の棒、テープ、ゴムなどは使用していない。ウレタンチューブ製の感觸器によって水を察知し、バルブを閉じて自ら方向転換することができる。



Animaris Umerus Segundus | アニマリス・ユメラス・セグンドス

スイシディーム期に位置づけられるビーストの二代目。ユメラスとはラテン語で「肩」を意味する。脚がある姿勢をとると接合部(肩)にある“筋肉”³が動き出して歩行を行う。今回は展示されないヴァポラム期のビーストたちが備え始めた。初代の構造形態を残し、駆動システムをスティック・ポール(スキーのスティックのように地面を押して動くシステム)に変えて駆動速度を速め、砂浜でのスタック(足が砂に埋もれる)から回避し易く進化した。

3. ビーストたちの“筋肉”とは、ペットボトルでできた風を貯めて圧縮空気にするための器官。



Animaris Turgentia Vela | アニマリス・トゥルゼンティア・ヴェーラ

「トゥルゼンティア・ヴェーラ」とは「膨らむ帆」という意味。アニマリス・オルディスを二体つなげて生み出された。大きな帆によって弱い風でも動き、時速 15 km ほどで歩行が可能。転倒することを防ぐための突き梁をアボディアキュラから引き継いでいる。



Animaris Bruchus Segundus | アニマリス・ブルハス・セグンドス

近年誕生したブルハム期のビーストたちは、今回日本初上陸。「ブルハス」とは芋虫を意味する。このキャタピラ型のビーストでは、関節部への砂の混入という課題を克服した。現在、風を動力に移動できるよう進化する途上だ。



THEO JANSSEN

2017/7/15-9/18

三重県立美術館

〒514-0007 津市大谷町11
TEL. 059-227-2100 (代表)
FAX. 059-223-0570
<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/>

三重県立美術館

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM

テオ・ヤンセン展

主催:三重県立美術館/中日新聞社/東海テレビ放送/三重テレビ放送



←谷
Theo Jansen
テオ・ヤンセン

昆虫や動物のようななかたちをした、風を食べて動く巨大な人工生命体の制作で世界的に知られているオランダのアーティスト、テオ・ヤンセン(1948-)。「私はどうしても進化というものを自分の目で観察したかった。」――その欲求を満たすために彼がコンピュータ上で生み出した生命体は、その後スクリーンから飛び出し、彼自身が名付けた砂浜の生物「strandbeest(ストランドビースト)」となった。様々な試行錯誤を重ねた結果、今ではプラスチックチューブを基本要素として進化を続け、自ら危険を察知し防御する能力を持つものまで現れた。

彼の住むオランダは、500年以上も前から風車によって海水を汲みだす干拓が行われ、現在は国土の約30%が海水面よりも低くなっている。オランダの人々は自然の作用について考え、つよく生きるためにアイデアを生み出す気質にあふれているが、そうした環境で育った彼が、エコロジーを意識した制作を続けることは当然であったのかもしれない。

今回の展覧会は、日本では未発表の最新作を中心に選択されたほか、構想スケッチ、動きの秘密がわかる基本パーツに至るまで、テオの創造するビースト(生命体)たちの魅力が紹介される。

1.『テオ・ヤンセン展』カタログ 2009年 p.15

- 1948年 オランダ・スフェベニンゲン出身
- 1968年 デルフト工科大学で物理学を専攻
- 1975年 画家に転向
- 1980年 デルフト上空に手作りのUFOを打ち上げ、人々の認識・反応を調査するアート・プロジェクトをおこなう
- 1985年 レンズから入る光を利用した等倍率の自動絵描きマシーンを発明
- 1990年 ストランドビーストの制作開始
- 2006年 ストランドビーストを使用したBMWのCMが南アフリカで放映
- 2009年 6月 第1回「エコー・フェスティバル」にて、UNEP(国連環境計画)より『エコー・アート・アワード』が授与される
- 2010年 6月 個展(ソウル)
- 2010年12月 個展(日本科学未来館、東京)
- 2011年12月 個展(国立台湾科学教育館、台北)
- 2014年 4月 個展(シテ科学産業博物館、パリ)
- 2015年 9月 個展(ピーボディ・エセックス博物館、マサチューセッツ)
- 2017年 7月 個展(三重県立美術館)、その後沖縄県立博物館・美術館、ヴィクトリア国立ミュージアム(オーストラリア)、国立レオナルド・ダ・ヴィンチ記念科学博物館などを巡回予定

←谷 Strandbeest Family tree ストランドビースト進化系統樹

この系統樹は(株)学研プラスの提供データをもとに作成しました。
タイトルが黄色の作品が、今回出品作品もしくは、同じ系統の作品です。

